陛下と私　― SideStory ―

桂木翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陛下と私　－　ＳｉｄｅＳｔｏｒｙ　－

【Ｎコード】
Ｎ７５２２Ｓ

【作者名】
桂木翠

【あらすじ】
『陛下と私』の　ＳｉｄｅＳｔｏｒｙ　です。【Ｒ１５・サイトより転載】

…1

陛下と私が同じベッドで就寝するようになって、幾日かが経ったある日の夜の事。

私の心は、とある事に沈んでいた。

「はぁ……」

「なんだ、溜息などついて。眠れないのか？」

隣で横になっている私の様子が気になったのか、まだ眠りの世界に行っていなかったらしい陛下が、枕を揺らしながら超絶美形な顔を此方に向けてきた。

私は再度溜息をつきながら両手を掛布の中から出し、陛下の方へと横向きになる。

「違いますよ。目を瞑れば三秒で夢の世界に行ける自信がありますけど、思い出しちゃったんです、私ってば」

「思い出した？　何を？」

「こっちの世界に来ちゃったから、パーシヴァル様と私の熱い愛のお話の続き、『愛と絶望の黒薔薇魔帝国物語２～魔皇帝復活愛憎編～』が出来ない事を……悲し過ぎます」

初回特典スペシャルドラマＣＤ付き本体同梱版の本体がパーシヴァル様仕様だったのに、ドラマＣＤの声優出演陣が物凄く豪華だったのに、と半分涙目になりながら付け加えると、陛下の整った黄金の眉が中央に寄った。

「――――くだらん。寝る」

陛下がクルリと私に背を向けた。

そんな冷酷で非情な彼の背中を、私は掛布を腰まで跳ね退けてバ

シバシと叩く。
「くだらんって、酷い！　私とパーシヴァル様の愛は永遠に不滅なんですよ？！　ラヴラヴのアツアツのドロンドロンなんです！　それをくだらんって何ですか！」
「……」
「ちょっと！」
「……」
「ちょっとちょっとちょっと！　へ・い・か！」
「……」
「もう！　呼ばれたら返事を――――お……あれ？　なんで？　そこでなんで私のオナカを揉むんですか？　え、本当に何で？」
背中を向けていた陛下が、後ろ手に私のオナカをモニモニと揉みだした。
次いで、何故かクイクイと肉を軽く引っ張る。
そして呆れたように小さく息を吐くと、もそもそと私の方へと横向きになった。
「……小娘、腹の肉がまた増えていないか？　柔らかさも増しているような気がするし」
「は？」
「減量の努力をして……いや、していないな？　お前はな？　調子に乗っていると、このままでは本当に取り返しのつかない体型になるぞ」
「え……そこまで？」
「ああ。そこまでだ」
呆れの視線を向けられながら陛下にそう断言されて、私の心臓が急にバクバクしてくる。
だって元々の体重が五十キロ。
異世界トリップ前に三キロ太って、トリエスに来た時は五十三キロだったはずだ。
その時点で制服のスカートが既にキツめで、近いうちにダイエッ

トをしようと思っていたし、陛下には少し前に『増えているのでは』と既に言われていた。
なのに、オナカの肉が更に増えたのだとしたら、今現在の私の体重は一体――――。
「ど……どうしたらいいですか、陛下！」
私はあまりの恐怖に陛下のパジャマモドキにしがみついた。
頭の中にタニタの体重計がボンッと出現し、有り得ない数字が強烈な光を放ちながら表示される。
あんまりな予想数字に私はカタカタと震えてしまって、思わず陛下にピッタリと抱きついてしまった。
そんな私の髪の毛を、陛下の呆れ返ったような溜息が揺らす。
「どうしたらも何も、真剣に減量に励めばよいのでは？　余がお前なら十日で結果を出してみせるが？」
「カラフェス二個分も？」
「増えただろう分も考慮に入れてカラフェス三個だ。簡単だろう？」
「やややややややっ、カラフェス三個と言ったら六キロじゃないですか！　ちっとも簡単じゃないですよ！　向こうの世界では皆なかなか痩せられなくてダイエット、えっと減量を補助する商品が高値でもよく売れるんです！」
笑顔の胡散臭い外国人がオナカの脂肪をピクピクさせる機械とか、低カロリーのカラフルな液体とか、寒天入りのお粥とかね！
絶対に六キロなんて無理です、と私が口をパクパクさせながら陛下の顔に目を向けると、彼の澄んだ紫の瞳も此方に向いた。
「いいように搾取されているだけなのでは？　単に己の意志が弱いだけだろうが。金をかければ痩せるなどという甘い考えは捨てろ。食を減らし、運動すればよいだけだ」
「お……そうですけど、でも、それが難しいんじゃないですか！」
「食わなければよいだけだろう？」
「だからそれが難しいんですって！　あー…十日間でいいから陛下と私の中身が入れ換わればいいのに！」

話の流れが掴めなくなってきたといったふうに、陛下が長い黄金の睫毛を幾度か瞬かせた。
「中身が入れ換わる？」
「はい。向こうの世界にそういうお話が幾つもあるんです。精神が入れ換わるというか」
「ほう？」
「ねねね、陛下、もし陛下と私の中身が一時でも入れ換わったら、私の代りに痩せてくれます？」
「そうだな。ありえない話だが、そうなった場合は代りに減量に励んでもよい。余からすれば難しいとは思えないからな」
　そのくらいなら簡単だ、と陛下がほんの少しだけだが笑みを見せた。
「おおおおおぅ！　本当ですか？！　やややっ、入れ換わりたい！　もし入れ換わったら、私も陛下の為にひと肌脱いであげますからね！」
　その時は、ま・か・せ・て・ね！
　陛下から体を離して彼の二の腕をポムポムと叩くと、綺麗な紫の瞳が瞬時に不審の色に染まった。
「ひと肌脱ぐ？　何をするつもりだ」
「それは勿論、トリエスの次代の王様を作るんです！」
「なに？」
「子・づ・く・り・に・励・む・ん・で・す！　目標、一日二十四人制覇ですよ！　目についた女性を片っ端から抱きまくります！　身分は問わずにです！　陛下の地位権力財力と超絶美形の容姿なら、一発優しく微笑んでみれば拒否する女性は皆無だと思うんですよね！　おおおおぅ、そうなったら凄い楽しみ！　男性が味わう快楽ってどんなだろう！　私ってば、興味津津です！」
「……小娘」
「ねね、陛下、トリエスって男女入れ換わりの魔法を使える魔女とか居ないんですか？　怪しくて深い森の奥とかに！」

「居てたまるか！　もしそういう事が出来る者が居たとしても、お前とだけは絶対に入れ換わらん！」
　むしろ該当の魔女を早々に始末してやる、と陛下は言い捨てた。
「ままま、そう言わずに！　というかですね、私がしたいのは陛下の為の子作りだけではないんです！」
「だけではないだと？！」
「はい！　私ってばね、自分を一度抱いてみたいんですよね！　きゃっ！」
　いやーん、と頬に手を当てて私が身悶えてみると、陛下がポカンとした表情になった。
「は？　お前は何を？」
「何をって？　陛下と私が入れ換わったら、陛下の体を使って自分を抱いてみたいって言ってるんですけど？　私ってば、どんな顔をしてオトコに抱かれるのか、相手の視点から見てみたいんですよね！　それに陛下もお得じゃないですか！」
「……お前の言っている事が脳内でうまく処理出来ない。――――得とは？」
　陛下が酷い頭痛がすると言わんばかりに額に手をあてた。
　サラサラストレートな黄金の髪が、指の隙間からパラパラと零れ落ちていく。
「それはですね、オトコなのに陛下ってば処女の痛みを味わう事が――――」
「ふざけるな！　それでは何か！　余は己の体に抱かれると？！」
「そうです！　さっきからそう言って――――って、あれ？　陛下ってば、なんでそんなに怒って？」
「当たり前だ！　おぞましい！　どんな拷問だ！　寝るっ！」
「へい――――」
「五月蠅い！」
　そう声を荒げると陛下は再びクルリと私から背を向けて、いくら声をかけても応えてくれなかった。

――こうして二人の夜が更けていく。

…2

陛下と私が同じベッドで就寝するようになって、幾日かが経ったある日の夜の事。

私の心は、とある事に沈んでいた。

「はぁ……」

「なんだ、溜息などついて。眠れないのか？」

隣で横になっている私の様子が気になったのか、まだ眠りの世界に行っていなかったらしい陛下が、枕を揺らしながら超絶美形な顔を此方に向けてきた。

私は再度溜息をつきながら両手を掛布の中から出し、陛下の方へと横向きになる。

「違いますよ。目を瞑れば三秒で夢の世界に行ける自信がありますけど、思い出しちゃったんです、私ってば」

「思い出した？　何を？　――――待て、この会話の流れはつい先日にもあったような気が」

「なんで待たないと駄目なんですか？　陛下の言っている事がよく判りません。ねね、陛下、私ってば、なんでこんなに貧乳なんですか？　遺伝だとしても限度ってものがあると思うんですけど……悲し過ぎます」

オナカのお肉が胸に移動してくれればいいのに、お尻のお肉を千切って胸に付けられればいいのに、と半分涙目になりながら付け加えると、陛下の整った黄金の眉が中央に寄った。

「――――どうでもいい。寝る」

陛下がクルリと私に背を向けた。

そんな冷酷で非情な彼の背中のツボを、私は掛布を腰まで跳ね退

けてゴリゴリと渾身の力を込めて押しまくる。
「……いっ、痛い、小娘っ」
「痛くて当然です！　それよりも、どうでもいいって、酷い！　へ・い・か、聞いて下さいよ！　今日の昼間にね、貧乳モリモリ改造用ブラ作成の為に、貧乳同盟同士のローラとロッテと一緒に、陛下の部屋でアニに胸の採寸をしてもらったんですよ。それでね？」
　そこまで言うと、陛下がツボを押していた私の手をパシッと後ろ手に払いながら、もそもそと此方へと横向きになった。
「なんだ、その同盟は。それより小娘、国王である余の部屋にローラとロッテを入れるな。筋が違ってくる」
「筋って？　そんな事どうでもいいじゃないですか！　ねねねねね、それよりもですね、その時アニってば、私とローラとロッテの生チチを同時に見て固まったんです！　目を全開に見開いて驚愕してたんですよ！　なんでだと思います？」
　その時の光景を思い出してしまって、私の心臓が急にバクバクしてくる。
　あんまりな現実に私はカタカタと震えてしまって、思わず陛下にベッタリと抱きついてしまった。
　そんな私の髪の毛を、彼のうんざりしたような溜息が揺らす。
「……判らん。くっつくな」
「胸の大きさがあまり変わらないと思われていたローラとロッテよりも、私の胸が凄く小さかったからなんです！」
　陛下、どうしたらいいですか、と私が口をパクパクさせながら彼の顔に目を向けると、陛下の澄んだ紫の瞳も此方に向いた。
「……」
「そりゃあ、二人と陛下専用のお風呂に一緒に入った時、彼女たちよりも少し小さいかな、とは思いましたけどね？　でもでもでもでも！」
「……二人が入ったのか。小娘、理解して欲しいのだがな？　余がどう思う思わないに関わらず世の中には守らなければならないもの

が――」
「陛下、いいから私の話を聞いて下さいよ！　それでその後のアニ、どういう反応をしたと思いますか？！」
　もういい加減にしてくれといったふうに、陛下が長い黄金の睫毛を幾度か瞬かせた。
「……目を逸らしたとか」
「違いますよ！　気の毒そうな顔をしたんです！　可哀想ってアニの琥珀の瞳が思いっきり言ってたんですよ！　知ってますか、へ・い・か！　そういう場合、笑いで流してくれた方が救われるって！
　マラソン……えっと持久走の競技大会で争いに大敗して最後の順位になった人間を、走り終わった他の生徒と校長をはじめとした先生達が皆一斉に立ち上がって拍手して迎えて、
『よくやった！　えらいぞ！』
『ゴールまであと少しだ！　頑張れ！　頑張れ！』
『きゃー！　あと、ちょっとだよぉ！　が・ん・ば！』
『君の頑張りは我が校の誇りだ！』
なんて、心にもない励ましを大声でされるくらい悲しくて恥ずかしくて遣る瀬無い事なんです！」
「随分と詳細を語るが、もしかしなくても経験談か？」
「……」
「経験談なんだな、小娘」
「へいかぁ……私ってば、胸も無いんですけど、足も凄く遅くて……」
　走ること自体は嫌いじゃないんですけど、と言いながら陛下から体を離して彼の喉仏をグリグリとしてみると、綺麗な紫の瞳が瞬時に不快の色に染まった。
「腹の肉を少しでも減らせば、ひとつくらい順位も上がるのでは？
　もう寝ろ。余は眠くて――」
「へいかぁぁぁぁぁ」
「……なんだ」

「私の胸、揉んで下さい！」
「なに？」
「揉・ん・で・く・だ・さ・いっ・て・言っ・た・ん・で・す・よ！」
ほらほら早く、とナイトドレスを捲り上げながら、彼の手を掴んで私の悲しき貧乳に押し付けてみると、陛下がキョトンとした表情になった。
「……」
「足が遅いのはもう仕方ないとしても、胸は異性に揉まれればどうにかなると、やっぱり私ってば思うんです！　だから！」
「ふざけるな！　前にも言ったが幻想を抱くのは止めろ！　よく判らん理屈に希望を託すなど馬鹿げているとは思わないのか？！　手を放せ！」
「いいじゃないですか、揉むくらい！　私の胸の上で手をちょっと動かすだけです！」
「お前は本当に人の手を何だと思っ――――」
「ほら、ちょぴっとでいいんです、動かしてみて下さい。モミモミって」
「……現実を言うのは悪いと思うが、揉み様が無いだろう？　それくらい無い、お前の胸は」
陛下が酷い頭痛がすると言わんばかりに、私の胸にある手とは反対の手を額にあてた。
サラサラストレートな黄金の髪が、それによってクシャリと乱れる。
「そっ、そうなんですか？！　あ、そうだ！　あのあの、じゃあ横向きでも、もう少し前屈みになったら、横のお肉がたくさん胸に流れて陛下も揉みやすくなるかも！　――――どうですか？」
「ああ、これならまだ――――」
「……ぁ」
「……」

「……ん」
「……」
「……はぅ」
「……なぜ声を？」
「いえね、なんか陛下が揉みながら先端を指で挟んだ時、ちょっと変な感じがって、あれ？　陛下ってば、なんで止めちゃうんですか？」
「……本気で何をしているのだろう、余は。お前とは必要以上に関わりたくない。決して行ってはいけない世界の境界線が、いま見えた」
「陛下？」
「もう本当に寝る。話しかけないでくれないか。――――頼むから」
言って、私のナイトドレスの中からスッと手を抜くと、陛下はクルリと背を向けて、いくら声をかけても応えてくれなかった。

――――こうして二人の夜が更けていく。

…　占い師

ある日の昼下りの事。
リーザに妖精、アニにゼルマさんといつものメンバーで陛下の部屋に居ると、ヘロルドさんが遣って来た。
彼は、豪華応接セットで『い・ち・ご』の商品開発をアニとしている私に、ロマンスグレーの微笑みを向ける。
それを見て、やっぱりセバスチャンだなぁ、と心の中で妙な関心をしていると、「陛下からの言伝でございます。『馬鹿な貴族が当たると評判らしい占い師を城に連れてきたんだが、小娘、興味があるのなら占ってみるか？』との事でございます。珍獣様は如何いたしますか？」とヘロルドさんが言った。
手にしていたモコモコ生地の試作品をローテーブルの上に置くと、私はヘロルドさんの方へと体の向きを変える。
「占い師ですか？」
「ええ。なんでもダルスアーダより東方の国の者で、目を閉じるだけで占えるとか」
「おおおおおぅ、目を閉じるだけって凄いですね！　エスパー、超能力者でしょうか？　どのくらい当るんですか？」
異能力保持者なんて陛下みたい！と言い足しながら私が目をキラキラと輝かせてみると、ヘロルドさんが苦笑した。
「さぁ、私にはなんとも。ただ、その占い師をお連れになった方は、自信満々でいらっしゃるそうですよ。陛下におかれましては呆れてあらせられました」
言って、どうします？といったようにヘロルドさんは目元を和らげると、私が座るソファーに近づいてくる。

「ややっ、興味あります！　有り有りです！　占って欲しいです！」
あるよ！　私ってば占って欲しい事があるよ！
はい！　はい！　と元気良く右手も左手も上げてみると、私を部屋の外へと促す為か、ヘロルドさんが立ち止った。
「では、琥珀の間にて行うそうでございますので、ご案内いたします」
「琥珀の間、ですか？」
「はい。陛下が外の者とお会いになられる際に、ご使用になる部屋でございます」
「おおおお、それは謁見の間という事ですか？！　ややややっ、私ってば、ついにお城の主要部分にまで足を踏み入れる事に！」
感激です！と言いながら私が立ち上がると、ヘロルドさんは上品な微笑みを作りながら、廊下に続く扉へと歩き出した。
私はその後をテクテクと素直についていく。
「残念ながら、主要部分という程の部屋ではございませんよ」
「そうなんですか？」
「ええ。儀式や賓客を謁見なされる際は、主に水晶の間をお使いになられますので。今回は占い師でございますし、本来ならば琥珀の間にもお通しになることはないのですが、」
「該当貴族が五月蠅かったり？」
「はい、そうでございます。占いなどインチキでいい加減なものに、何故、時間を割かねばならんのかと陛下は些かお怒りのようでいらっしゃいましたが、その貴族の方が、それはもう必死で」
「必死？　なんでですか？」
「きっと、昔に失ったものを取り戻したいのでございましょう」
ドリーセン侯爵という方でございます、と言いながら、ヘロルドさんは重厚な扉を静かに開けた。

ヘロルドさんに連れられて琥珀の間に入った私が最初に発した言葉は、「ねね、陛下、私ってば此処から入っても良かったんですか？」だった。
ヘロルドさんは“部屋”と先程言ったけれど、私にしたら大広間といっていい広さだ。
言うまでもなく部屋は豪華絢爛で、高い天井からは何個もキラキラシャンデリアがぶら下がり、大理石っぽい壁や何本もの円柱には、複雑な模様が琥珀と黄金によって描かれている。
どう見ても玉座な椅子に陛下は座っていて、彼は椅子の黄金仕様の肘掛けに、片肘を預けて頬杖をついていた。
私は玉座の左右にある扉から琥珀の間に入ったみたいだ。
入室した瞬間、陛下を除く全員の視線を私は浴びる。
多くはないけれど、琥珀の間には、陛下、部屋の中央に二人、両脇に二、三十人の貴族っぽい服装の男女が居た。
パッと見る限り、私が知っている貴族のヴィルフリートさんは見当たらない。
「構わん。此方に来い。お前は余の横に立っていろ」
「はい」
言われた通り、私は陛下の方へと向かった。
が、横に立っていろと言われても、玉座は何段かの階段の上にある。
上っていいのかどうなのか判らなかったから、とりあえず手前で足を止めると、クイッと陛下が顎を動かしたので、勇気を出して、私は多くの視線を感じるなか階段を上った。
「ヘロルドさんは主要部分という部屋ではないって言ってましたけど、なんだか無駄に豪華で大きい部屋ですね」
「無駄だと判っていても、そうしなければならない理由があるからな」

「理由って？」
「いろいろだ、いろいろ。忘れているかもしれないからもう一度言うが、此処は一応王城でな？　――――さて、始めようか」
陛下のその言葉に、部屋の中央に居るひとりが背筋を伸ばした。
緊張しているのか、黒い髪がかかった額から汗が滴り落ちる。
服装的に占い師を連れてきた貴族だろう。
彼は薄い灰褐色の瞳を陛下と私に向けると、若干震え気味の声音で占い師を紹介しだした。
「陛下、この者は東方の国出身の者でツァムジューと申します。今、評判の占い師でございまして、何でも占え、必ず当たるとか。私は陛下の御為に苦――――」
「よい。何を申したいのか予想がつく。御苦労だった。――――さて、評判の占い師とやら」
陛下は無情にもブチッと貴族の言葉を遮ると、貴族の斜め後ろに控えていた占い師へと澄んだ紫の瞳を向けた。
「はい、トリエス国王陛下」
占い師が一歩前へ進み出た。
占い師はトリエスの人たちとは明らかに違う文化の服装をしていて、飾りの付いた大きな朱色の布を頭から体全体に巻いている。
年齢は結構高齢のようだ。
加齢によって濁った眼を細めながら、占い師は陛下を見る。
「必ず当たるというのは本当か？」
「はて、人はそういいますがね」
「滑らかなトリエス語を話すようだが？」
「この国は儂には居心地が良くて」
「そうか。それは良かった。――――占い師、時間が惜しい故、早速本題にいこう」
そう言うと陛下は、頬杖を外して指を組んだ。
「余は占いに全く興味は無いが、この小娘の望むものを占ってやってくれ。これは余の珍獣だ」

「畏まりました。――――では珍獣様、どのような占いを望みますかね」
占い師が濁った瞳をギョロリと私に向けた。
それに思わず体がビクリとしてしまうけれど、異世界の占い師に占ってもらえる嬉しさの方が直ぐさま勝って、私は弾むように声を出す。
「えっと、ふたつあるんですけど、いいですか？」
占い師が頷いた。
「あのあの、ひとつは、私は日本……うーんと、家に帰れるのか！」
結果は早かった。
私の体内時計で三秒ほど占い師は目を閉じただけで、皺だらけの口を開く。
「無理、不可能。未来永劫帰還する事は出来ないと」
その占い結果に私は心の底から焦った。
当然だよね？！
日本に帰る気満々の私には到底看過できない占い結果だよ？！
陛下の高価そうな服を私はガシッと掴んだ。
「へ……陛下、どうしよう！　私、帰れないって！」
「……所詮は占いだ。あまり気にするな」
「ねえ、陛下」
「なんだ」
「私の帰る方法、ちゃんと調べてます？」
「前にも言ったが、異世界に関する情報は集めている」
「で？　結果は？」
「今のところ手ごたえはないな。全く」
「おおおおおお」
二人してモソモソと小さい声で話していると、占い師が「珍獣様、次を」と催促してきた。
陛下が僅かにだけだが眉を寄せる。
「あ、はいはい！　えっとですね、ふたつめは、私の恋愛について

！　この先、私に彼氏が出来――――」
「小娘、内容に気をつけろ。前に言ったはずだが？」
陛下が潜めた声で、興味を持つ素振りを見せるなと言っただろう、と続ける。
「――――占い師、聞き方を変えよう。現時点では小娘は余のものだ。だが、いずれ飽きる日がくるかもしれない。その場合、小娘に次の相手は見つかるのか占って欲しい」
占い師が再び頷いた。
朱色の布に付いている飾りがシャラリと音を鳴らす。
「そういう聞き方をすればいいのかぁ」
余のもの、という言い方にカチンときたが、私が首肯すると、陛下が疲れたように小さく息を吐きながら組んでいた手を解いた。
彼は玉座の黄金の肘掛けをカツンと軽く爪で弾く。
「少しは頭を使ってくれ、頼むから」
「でもさぁ」
「なんだ」
「陛下のよく判らない都合で、何で私が頭を使わないといけないんですか？　面倒臭い」
「……」
占い師が目を開けた。
「あ、結果出ました？　きゃっ！　私に次の相手は出来ますか？！いつ出来ますか？！」
「出来ないと」
「お……」
「……」
「珍獣様、貴女に次のお相手は現れない。決して」
「そ……そんな……」
陛下が憐みの視線を私に向けた。
「小娘、そう落ち込むな。時がくれば余が誰か探してやるから。相手が拒否しようものなら強制してでも――――」

「おおおおお、これは凄い！」
占い師が再び目を閉じて、突然大きな声を出した。
それに陛下も私もキョトンとしてしまう。
「へ？　凄いって？」
「凄いとは？」
「国王陛下と珍獣様は最良のご縁だと出ておる！」
「は？」
「なに？」
「この先、珍獣様に次のお相手が現れるはずもない！　珍獣様には最良最高のお相手である国王陛下が既にいらっしゃるではないか！
おお！　占いには死しても尚、二人はご一緒に過ごされると！
なんと素晴らしい！　長年たくさんの者を占ってきたが、これほどの結果を見たことは、とんと無かった！　なんという良縁！　お二人は運命の相手に出会われたのだ！」
占い師の理解出来ない大興奮を他所に、陛下と私は全身で呆れた。
「……運命の相手って」
「……やはり占いはあてにならんか。深く考えなくとも余とお前が良縁のはずがないだろうに」
「ね」
「ああ」
時間の無駄でしかなかった、と言って陛下は豪華な玉座から腰を上げ、私は大広間を出る彼の後を金魚の糞のようにただついていった。

…　仲好し小好し

ある日の朝の事。
食べる事が大好きな私でも、ちょっと多いんじゃ？と思う量の朝食を、陛下と一緒にとっていた時だ。
部屋に差し込む清爽な陽光に、朝っぱらから黄金の髪と睫毛をキラキラと輝かせている彼をなんとなく視界に入れながら、私はフッと部屋の片隅に居る存在を思い出した。
「そうだ、陛下、ウオちゃんって基本的に何を食べても平気みたいですけど、好きな食べ物は何ですか？」
そんな何気ない質問だったのに、耳にいれた途端、陛下は眉間に深い皺を刻んだ。
「……この間も言ったと思うが、余に判ると思うのか、お前は。何度も同じ事を言わせるな」
「は？　なに言ってるんですか？　え、謙遜？　だって、陛下ってばグイードさんと会話が出来———」
「謙遜ではない！　判らないと言っているんだ！　本当に何度も言っているが、余は両生類と会話は出来ない！　それにグイードは人間だ！　理解しろ！　理解してくれ！　右から左のその脳味噌でもな！」
それが世間一般の常識だと思うが？！と突然声を荒げて、手に力が入ってしまったのか、行儀悪くもガチャリとした食器の音を陛下は立てた。
「もう！　怒らなくてもいいじゃないですか！」
「お前が怒らせているんだ！　いつもな！」
「私が諸悪の根源みたいに言わないで下さいよ！　むむむむっ、

納得いきませんけど、とっても、とっても納得いきませんけど！
———まあでも、それはいいとしてですね、陛下、」
「……なんだ」
陛下は手にしていたナイフとフォークを、投げ遣り気味に食卓の上に放り投げた。
オコチャマ陛下の行儀の悪さに、私が眉をひそめると、それに気づいた彼の額に青筋がビシッと走る。
「あの、グイードさんは？」
言って、私は広く豪華な陛下の部屋を見回した。
今現在、彼の部屋に居るのは、部屋の主である陛下、居候の私、セバスチャンなヘロルドさん、清楚系美女リーザの計四人だ。
なんだか人数が少ないけれど、皆それぞれ忙しいらしくて、妖精二人は陛下の用でルドルフさんの所へ使いに遣られ、護衛のディルクさんは忘れた物があったとかで取りに行き、ゼルマさんは諸事情で不在、アニも『い・ち・ご』の用で不在で、陛下付き侍女は陛下の部屋から絶賛パージ中だ。
「……今日は非番だったはずだ」
不機嫌そうな顔で陛下は答えると、ヘロルドさんが注いだばかりの冷たそうな牛乳が入っているグラスを手にとる。
そしてそれを流石国王陛下といった上品さでクイクイと飲んだ。
ちなみにこの牛乳は、生キャラメル百倍濃縮並みの激毒物的飲み物ではない極普通の牛乳だ。
私が指摘した後、糖尿直結コースが怖かったのか、陛下は素直にあの超激甘ドリンクを口にするのを止めたようだった。
「え、じゃあ、ウオちゃんの朝ゴハンはどうするんですか？　ウオちゃんの栄養管理はグイードさんがしてくれているのに」
「知るか。放っておけ」
「酷い！　両生類にとって、三度のゴハンが何より大切かもしれないじゃないですか！」
「それはお前だろう？！」

また行儀悪くも、陛下は声を荒げながらドンッと音を立ててグラスを置いた。
その弾みで、食卓の上の皿たちも抗議の音を一斉に鳴らす。
私も負けじと、砂糖でコーティングされたクロワッサンらしきパンに、バリンと音を立ててフォークを突き立てた。
「正解です！　――――あれ、でもどうして判ったんですか？」
私にとって三度のゴハンは大切だよ！　大好きなんだよ！
栄養源だよ！　養分だよ！　脂肪の源だよ！
体・重・増・最・高！
なんて嘘だよ！　増えたら泣いちゃうからね？！
「……前に言っていただろう？　それに誰だって判る」
声のトーンを落としながら、長い睫毛に縁取られた澄んだ紫の瞳で此方を一睨みして、陛下は向こうでいう蜂蜜付きライ麦パンを手に取った。
先程、フォークとナイフを放り投げていたけれど、どうやら食事は続ける気のようだ。
「ねね、陛下、グイードさん呼んで下さいよ」
「くだらない用件で休みの人間に出てこいと？　余が呼び付けたらそのまま仕事に突入してしまうが？」
「え、なんで？」
「思い出せるのであれば今直ぐ思い出して欲しいが、余は国王でな？　一言が重く、発言力も影響力も強いんだ」
朝から年寄り臭い疲れた声音を出しながら、陛下はパンを置いてフォークとナイフを手に取った。
スクランブルエッグもどきを食べるみたいだ。
上にかかっているトマトソースを物凄く器用にナイフで避けだしている。
「そうかなぁ？　重そうにはちっとも感じないんですけど……」
「それはお前だけだ、小娘」
「うーん、じゃあ、どうしようかなぁ？　とりあえず、ウオちゃん、

此処に連れてこようかな」
可哀想だし、と続けて、私が席を立とうとすると、ウオちゃんが瞬時に食卓の上に現れた。
「きゅん」
その登場の仕方は、まるで瞬間移動でもしたみたいで――。
「……」
「……」
「きゅんぴ」
「……」
「……」
「ぴきゅぴきゅぴ？」
現実を受け入れる為に、私はコシコシと目を擦り、陛下は数秒ほど目を瞑った。
「……えっと、まあいいか？　あのさ、ウオちゃん、今日の朝は何食べる？　この食卓で栄養源になりそうな食べ物ある？　パンとサラダと果物、魚、肉、卵料理と一通りあるけど……」
「小娘、普通、両生類は――――ウオッ、お前、誰の皿の上のものにっ！」
またまた行儀悪くも陛下は再び声を荒げて、今度は盛大な音を立てて勢いよく立ち上がった。
振動で食卓の上の皿たちが、また抗議の音を一斉に鳴らす。
私も再び負けじと、ナイフで皿をキュリキュリと引っ掻きながら、ベーコンモドキを食べやすい大きさに切った。
「あ、ウオちゃん、スクランブルエッグが食べたいの？　え、陛下仕様の甘っこい蜂蜜付きライ麦パンも？」
よくその糖質の塊が食べられるねぇ、と感心しながらウオちゃんを見ていると、陛下の額の青筋がビキビキビキッと急増した。
「ウオ……貴様、何故、小娘の皿のでなく余の――――ウオッ！　ヘロルド、いや、リーザ、剣を持って来い！　今日こそ、この忌々しい両生類を始末してやる！」

そう言って、陛下は私の横に控えるリーザに向かって手を伸ばす。
瞬間、ウオちゃんが首を左右に振り、「ぴっぴっぴっぴっぴっぴっぴっぴっ」と彼を嘲笑するかのような声を出した。
陛下の黄金に煌めく長い睫毛が怒りに震える。
「あ、ウオちゃんが飛んだ！　ウオちゃん、逃げて、逃げてー」
「待て、ウオッ！」
陛下の大好きな甘々パンを咥えたウオちゃんは、まるで羽が生えているかのようにパタパタと私達の上を旋回し出した。
そんな中、侍女の鏡のリーザが陛下の命を直ぐさま遂行したのか、なんの装飾も無い実用的そうな剣を彼に差し出す。
キンとした音が朝食の場に響いた。
手にして直ぐに陛下が剣を抜いたのだ。
「陛下、朝食、食べないんですか？」
「ウオが口をつけたものなど食えるか！　ウオ！　下りてこい！細切れにしてやる！」
陛下が有ろう事か食卓の上に飛び乗り、剣を一閃させた。
あまりの行儀の悪さに、私は呆れの溜め息をついてしまう。
「陛下ってば大人気無いなぁ。そう思いませんか、ヘロルドさん、リーザ」
「……」
「……」
「きゅんきゅん！」
「殺す！」
「ふぅ、私ってば、オコチャマの相手で肩が凝っちゃう。――――あ、このクルミパンもどき、香ばしくて美味しい」
直ぐ傍でウオちゃんと仲好し小好しで戯れている陛下を眺めながら、私は踏まれまいとパンとスクランブルエッグの皿を持ち、ムシャムシャと朝食を食べ続けた。
余談だけど、ディルクさんの忘れ物は、グイードさんから頼まれ

ていたウオちゃんの食事だったんだって。

…　食後のお散歩

予定していた貴族との昼食会が中止になったと言って、陛下が私とお昼ゴハンを一緒に食べた或る日の午後。

相変わらず糖質モリモリな食事を取った陛下と、やはり相変わらずモリモリと食べ過ぎてしまった私は、食後の運動にと、少しだけ青薔薇庭園をフラフラする事に決めた。

その道すがらの事だ。

少し脇に逸れた背の低い木々に囲まれたちょっとした空間で、ウオちゃんと芝生の上にペタリと座り込んでいるグイードさんを私達は発見する。

「あれ、ウオちゃん、部屋に居ないなぁと思ったら、グイードさんと日向ぼっこしていたんですね」

「最近、グイードになかなか休みを取らせてやれなかったからな。今日は休憩時間を多く与えた。……だが、その時間を両生類と過ごすのはどうなんだ」

気が知れない、と陛下は言って、何故か背の低い木に身を隠すように、ウオちゃん達に近づいた。

とりあえず、私もそれに習ってみる。

「陛下、何しているんですか？　え、覗き見？」

「いや、なにやら深刻そうに話しをしているようなのでな。少々気になって、」

「覗き見じゃないですか。でもでも、話しをしているんですか？」

「ああ。ウオは判らんが、グイードが」

「グイードさん、口が全く動いてないですけど……。それに深刻そうにも見えないというか、普段と全く変わらないというか」
「何故判らないんだ。これまで目にした事がないくらいの深刻さだが？」
そう言うと陛下は、「そこでは気づかれる。あまり近づき過ぎるな」と、私に片腕をまわし、自分の懐に入れた。
ピッタリと陛下の胸に背をくっつけた私を、彼の纏う匂いが包む。
それに、なんとも言えない気分になりつつ、私はウオちゃん達に気づかれないように、陛下の喉元に口を寄せて会話する事にした。
「グイードさんが話しているようには、私にはさっぱり見えないし、聞こえないんですけど、何を言っているんですか、彼」
「ウオに話しかけているようなんだが、どうも余とお前の事を言っている――」
陛下の言葉が止まった。
不思議に思い、見上げると、彼は澄んだ紫の瞳を驚愕に見開いている。
「どうしたんですか？」
そう陛下に問いかけたのと同時に、ウオちゃんの声が私の耳に入ってきた。
『きゅんきゅんぴ。……きゅぴきゅぴきゅ？』
『……』
「ねえ、陛下、なに驚いた顔をしているんですか？」
「……」
『ぷきゅんぷきゅぴぷみぷみ、ぴきゅぴきゅみぷみ』
『……』
「へ・い・か！　ど・う・し・た・のっ・てば！　私ってば、聞いているんですけど？」
「……」
『きゅんきゅん。ぴきゅぴきゅ、みゅんぴ、ききゅきゅきゅぴぴぴぴみゅぴぴぴぴ』

『……』
「グイードさん、なに話しているんですか？　ねね、　お・し・え・て・よ！」
「……」
『きゅんきゅん』
『……』
「陛下ばっかりずるい！　私も知りたいです！　ねえ、本当に何を話して――」
「……部屋に戻る。酷い頭痛がしてきた」
「え、頭痛？」
「ああ。午後の予定は全て取り止める」
「は？」
「今日はもう働きたくない。何もしたくない。何も考えたくない」
「ややっ、ちょっとどうしちゃったんですか？」
陛下は私を懐に入れながら静かに後退して、ウオちゃん達と適当な距離が開いたところで姿勢を元に戻した。
腕をまわしていたついでなのだろう、陛下が私を荷物のように抱っこしたので、落ちないようにと彼の首に両腕をまわす。
陛下はそのままスタスタと早い速度で部屋へと戻っていった。
部屋に着いてからも、グイードさんが何を話していたのか何度も聞いたのだけど、彼はガンとしてその件に関しては口を開かない。
仕方無いので私は聞くのを諦め、その日はそれからずっと、二人して寝台の上でゴロゴロとしていた。
あまりに暇すぎて、「陛下の枝毛、見つけてあげますね」と私が言い出して、互いに枝毛の探し合いまでしてしまう始末だ。
勿論、枝毛があったのは私だけだったんだけど。
んで、陛下ってば、机の引き出しから鋏を取り出して、私の枝毛を切り出したんだけどさ。
最初は有り難く思っていたんだけど、几帳面というか細かすぎて、なかなか終わらなくてさ！

だから私ってば面倒になって、「一思いにバッツリ肩上あたりで切っちゃって下さい」って言ったんだけど、何故だか凄く怒られたんだよね！

納得いかなすぎて、髪の毛を纏めていたリボンを、陛下の黄金の髪の毛につけてあげたよ！

お姫様みたいに！

そしたら、もう大喧嘩！

私達の怒鳴り声が部屋の外までダダ漏れだったらしくて、ヘロルドさんとリーザが大慌てで止めにきたよ！

やってらんない！

…　食後のお散歩（後書き）

※　グイードさんは一方的に話しかけているだけで、ウオちゃんとは会話が出来ません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7522s/

陛下と私　― SideStory ―

2011年12月1日02時38分発行